

6.22 Premiere

初日舞台に、踊る



初日、暦の上では夏至だが外では雨がしとしと降る中、客席はビッシリ埋まっていた。蜷川幸雄は「この舞台には正面や横という視点の階級制はない」と言った。船のデッキを模した装置は開かれた空間であり、団員達と高度な芝居に挑む蜷川の宣戦布告の如く堂々と舞台中央に存在していた。観劇に来た俳優・高橋洋は「三方からお客さんに見られ、しかも距離も近い。俳優としては緊張する舞台構造ですね」とつぶやいた。

開演前から俳優が現れブラブラと動く。かすかな波音が聞こえる中、芝居がはじまった。

(私は避けられてると思ったの)

稽古開始から繰り返し稽古が行われた難関だ。この台詞を言う上村正子は日々稽古前にひとりでロビーや外で練習を続け、「ゲネプロ(本番直前の通し稽古)数日前に手応えを得た」そうだ。

語られない言葉が身体から滲み出る

この役は、皆に疎まれてる理由に気づかず現実逃避を続ける。この役だけでなく登場人物は皆「自分は何者なのか」「どこに向かおうとしているのか」わからず揺れている。岩松が台詞の裏に潜ませた想いを蜷川が的確に読み解き丁寧に立体化する。個々の心理状態や互いの距離感が痛いほど伝わってきた。

団員たちも各々役の言動の動機を考えている。劇中、何かとすぐ泣き出す役を演じた大串三和子は「いい年齢ですぐ泣くのはおかしい。でも先行きのことがとっても不安なんだと思う。その役が何に反応して感情が高ぶるのか理由を考えています」と描かれていない役の物語を自分の体験などを元に創り出していた。

なにしろ蜷川のダメ出しを「戦時中の爆撃に比べたらこわくない」などと言う体験豊富な団員たちだ。彼らの強烈な個性が役に深い陰影をつける。特に外国語を発する難民役は身体表現だけが頼り。「職業的俳優には出せない雰囲気がある」と蜷川。

蜷川は「岩松さんは中間公演での踊りに感動して、この作品にダンスを採り入れたと思う」とダンスシーンにも力を入れた。ドレスアップした団員たちが背筋をのばし顔をあげ「ベサメムーチョ」を歌い踊るシーンではフェリーニの『ボイス・オブ・ムーン』にある「ダンスは刺繍だ。ダンスは人生の讃歌

だ」という台詞を思わせた。クライマックスの白塗りでチュチュの男2人の舞も壮絶。懸命な筋肉の動きが、チェーホフ『三人姉妹』の「生きていきましょう」にも似た想いを語っていた。

44人の「全身言葉」の姿に、観客は共鳴し大きな拍手を送った。蜷川の仕掛けた立体的な空間が、この戯曲は世界の縮図だという理解を大いに助けた。

初日終了後ある団員は「これで満足ではない。まだまだ進化させたい」と言った。(1年を振り返り)「感無量です」みたいな言葉葉を想像していたのに、なんとも逞しい言葉が清々しかった。



さいたまゴールド・シアター

蜷川幸雄率いる、55歳以上の団員46名による演劇集団。募集はこれまでの演劇経験を問わないもので、2週間にわたるオーディションによって選ばれた。2006年4月発足、5月から1年後の本公演をめざしてレッスンを開始。個人史をベースにした身体表現によるこれまでにない演劇を追求し、過去2回中間公演を実施した。

S A I T A M A G O L D T H E A T E R



蜷川幸雄の演出とマイケル・ナイマンの音楽で実現する、カリスマ作家ガルシア・マルケスの情景の世界。運命に身を投じる美青年ウリセス役にストレイトブレイ初挑戦の中川晃教。あらゆる男が魅了されるエレンディア役を、映画「さくらん」出演などめざましい活躍をみせる美波が演じる。

エレンディア
erendiria

運命づけられた人 文=高橋千秋(映画ライター)

あなたには、「出会えてよかった」と思える人っていますか? 「出会わなければよかった」って思う人は? けれどまあ、それも運命のひとつ。エレンディアとウリセスの出会いも、たぶん避けようのない運命(の悪戯?) だったのかもしれない。エレンディアは言いようのない魅力に満ちた「いたいけな娼婦」。強欲な祖母に命じられて、毎日男たちに体を売っている。かたや、ウリセスは純な青年。エレンディアが好き、守りたい…… 澄んだ一途さに憑かれて、ある行動を起こします。彼らの出会いは、幸運それとも悲運? どちらにしても、もう後戻りはできない。「女の子」エレンディアの瞳の奥には、すでに「オンナ」の引力が燃えています。本人も気づいてない、したたかさも……。

突飛な情念の世界、けれど蜷川幸雄の演出のもと、美波(エレンディア)と中川晃教(ウリセス)が演じる、数奇でチクチクした「愛」の形は、もしかしたら「痛かっただけ」のあなたの記憶を、「でもそれも人生、あたしの」に変えるかも。原作者ガルシア・マルケスは、南米生まれのノーベル文学賞作家。「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」の監督マイク・ニューウェルもマルケスの信奉者で、彼の作品「コレラの時代の愛」映画化を心底望み続けて、ようやく実現。すでに撮影をスタートさせており、2007年の11月には全米公開となる予定です。

数え切れない「出会い」に戸惑い揺らめくまなざしを、この舞台にひとときゆだねる。それもまた、「新しい出会い」なのかもしれません。

STORY

過失から祖母の家を全焼させてしまった少女エレンディアは、その責任をとるため、祖母により、娼婦として1日に何人もの客を取らされている。その美しさから、瞬刻間に男達の人気を集めていたエレンディアだったが、ある時、彼女は本当の愛を誓う美青年ウリセスと出会う。2人は祖母からの脱出を試みるが、あっさりとつかまってしまふ。祖母から逃げるには彼女を殺さないと考えた2人は、それを実行しようとするが……。

PLAY

蜷川幸雄演出 見世物祝祭劇 『エレンディア』

【日時】8月9日(木)～9月2日(日) 全27公演

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【原作】ガルシア・マルケス 【脚本】坂手洋二

【演出】蜷川幸雄 【音楽】マイケル・ナイマン

【出演】中川晃教 美波 園村隼 瑠川哲朗ほか

【チケット(税込)】好評発売中

一般 S席12,000円 A席7,000円

メンバーズ S席10,800円 A席6,300円

【バックステージ・ツアー】8月15日(水) 対象者:チケット購入者・要申込

【talk・talk・talk 第8回】8月16日(木) 出演:中川晃教 美波 ほか

※詳細は財団ホームページ <http://www.saf.or.jp/>